

関東取締出役の教諭と組合村運営

—— 武州八条村寄場組合を事例に ——

児 玉 憲 治

はじめに

近世後期の関東農村は、幕藩権力から様々な種類の支配を受けたが、その一つに、関東取締出役―改革組合村による支配がある。これは「百姓風俗」の奢侈化を問題視した幕府が、個別領主支配を超えて、関東全域に対して取締政策をおこなったものである。文化二（一八〇五）年に関東取締出役を設置して、無宿・悪党の捕縛をおこなわせ、文政一〇（一八二七）年には改革組合村（寄場組合）を設置して関東農村を組織化し、村々に地域の取締を担わせた（文政改革）。以後、関東取締出役は改革組合村を通じて、囚人の処理や各種の取締政策を申し渡していく。これら関東取締出役の諸活動は、かつて幕府による関東の一円的支

配と評されてきたが、筆者は以前、身分が低く、大した権限をもたない関東取締出役の活動は、おもに個別領主支配と抵触しない「教諭」（社会規範と受け手の自主性に依拠した支配）というレベルでおこなわれたのであり、ここに関東を一円支配しようとする幕府の意図は読み取れないと主張した¹⁾。

右のような理解に立つと、この支配を受けた地域社会（改革組合村）の捉え方についても、修正が必要となってくる。従来、改革組合村研究の主要な論点は、これが地域の自治的な組織なのか、体制的な組織なのか、という問いにあり、おもに地域結合のあり方、または組合村運営のあり方を分析して評価を導き出そうとする方法が取られてきた。しかしここでは、教諭という関東取締出役の支配の特

質が考慮されていない。たいした権限をもたない関東取締出役は、一定程度地域の自主性に依拠した支配をおこなない、それを調達すべく教諭をおこなったのであるから、教諭が村々の主体性にどのように作用したのかを注視しなければ、改革組合村の動向は捉えきれないと考える⁽²⁾。

本稿は、こうした観点から、関東取締出役の支配を地域社会（改革組合村）がどのように認識し、対応していったのかを検討する事例研究である。具体的には、次の三点を問題としたい。第一に、関東取締出役の教諭の具体相はどのようなものであったのか。第二に、その教諭というやり方を、組合村運営を担う惣代層はどのように認識したのか（第一章・第二章）。第三に、教諭が組合村の主体的な運営に何をもたらしたのか（第三章）。すなわち、教諭という政策のやり方が及ぼす作用に着目して、地域社会の主体性の問題を考察していきたい。

事例とするのは、武州八条村寄場組合である。同組合は、越谷宿から草加宿に至る日光道中の東側に位置する三五カ村からなる改革組合村である。現在の地名では、埼玉県八潮市・越谷市・草加市域にまたがる。

この三五カ村は「八条領」と呼ばれ、文政改革以前から、幕府の鷹場支配や用水支配の局面で一つの組合村として行動していた⁽³⁾。文政改革時にも、最初に関東取締出役の

提示したプランでは、三五カ村のうち九カ村が別の組合に組み込まれる予定であったが、九カ村の訴願によって、八条領三五カ村による組合結成が認められたという⁽⁴⁾。このように、八条村寄場組合の特徴の一つは、村々の要望により、「領」という既存の地域支配単位を基盤としている点にある。なお領主支配では、幕領（二〜三代官）、旗本領（六家）、武州忍藩領、寺社領に分かれる。

八条村寄場組合の内部は、七つの小組合に分かれ、それぞれ小惣代（小組合の代表者）が一人ずついた。組合全体の代表である大惣代は、所属する小組合に関係なく選ばれ、文政一二（一八二九）年には七名、天保一五（一八四四）年には四名いた⁽⁵⁾。文政から天保期にかけて減少傾向にあるが、一般に大惣代は一〜三人程度の場合が多いから、他組合に比べて惣代層の人数が多い点が、この組合村の特徴である。本稿では、大惣代を勤めた者のうち、まとまって記録を残してくれている、川崎村名主（佐藤）平次郎、西袋村名主（小澤）平右衛門という二人の人物に焦点を当て、彼らの認識を中心に分析を進めたい。

一 文政改革教諭の受容

文政改革時、関東取締出役は政策の趣意を教諭しながら

各地を廻村し、改革組合村を結成させていった。まずは、当該地域の惣代層が文政改革時の教諭（以下、文政改革教諭と略記）をどのように受け止めていたかを見ていきたい。

天保二（一八三一）年より川崎村名主を勤め、八条村寄場組合の大惣代でもあった平次郎は、文政一〇（弘化二（一八二七）四五）年までの改革組合村関連の帳面を合冊して四冊にまとめた「御改革諸記録」と題する史料を残している。⁽⁶⁾ その一冊目の表紙裏に、次のような書き込みと署名がある。

子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、道之以德、齊之以礼、有恥且格

朱文公曰、道齊之以政刑、則不能化其心、而但使之少革、到後政刑少弛、依舊又為惡矣

佐藤蔵書（印）

前半「子曰」云々は、『論語』の引用で、大意は「民を導くために政（法令・禁制の意）を用い、治めるために刑罰をもつてすれば、民はそれから逃れようとするのみで恥を知ることはない。しかし徳をもつて民を導き、礼をもつて国を治めるならば、民は恥を知り、その身を正すようになる」というものである。後半「朱文公曰」云々は、若干文字に異同があるが、恐らく『論語』の当該部分について問答した『朱子語類』の一節で、大意は、「もし刑政を

もって治めようとしても、民の心まで教化することはできない。だから、単に少しずつ改革をして（刑政を完全に）して、のちに刑政を少しずつ緩めれば、また依然として民は悪をなすようになるだろう」となる。いずれも、「刑」「政」のみによつておこなわれる政治には限界があり、より根本的に重要なのは「徳」や「礼」によつて民衆の「心」を「化」すことだ、という主張である。この書き込みに続く一冊目の冒頭は、文政改革時に全ての組合村が締結した四〇カ条の議定（以下、文政改革議定）を、関東取締出役の立場から逐条解説した「御勘定奉行石川主水正様勤役中関八州江之教諭書」⁽⁷⁾の写しである。すなわち、平次郎は、関東取締出役による文政改革教諭を、民を徳化する良い政治として肯定的に評価したのである。⁽⁸⁾

続いて、西袋村名主平右衛門の認識を見ていこう。平右衛門は、八条村寄場組合が実質的に始動した文政一二（一八二九）年より安政二（一八五五）年まで、二〇数年間にわたつて大惣代を勤めた人物であるが、それと同時に、尚古堂という寺子屋の師匠でもあった。彼は文政改革の直後から、尚古堂で文政改革議定を教材として活用している。例えば、小沢正弘氏によれば、尚古堂の文庫（綾瀬館文庫）のなかには、文政一一年一月吉日付で「筆弟石井宗七」が写した「御改革御教諭書写」があると言う。石井宗

七は中馬場村から来ている筆子で、当時一七歳であつた。⁽¹⁰⁾また、同じ西袋村の小早川家に残る文政改革議定の写しは、奥書に「右議定書之儀者、小澤平右衛門依差図写之遣シ申候／文政十二丑年五月、小早川きよ写之／持主小早川長左衛門」とある。⁽¹¹⁾「小早川きよ」は、文政一〇年時点で尚古堂の「手習子供」の中に「おきよ」がいるから、これと同一人物であろう。すなわち、寺子屋の師匠である平右衛門が、筆子のきよに指示して文政改革議定を写させ、家に持ち帰らせたのである。

文政改革時に限らず、平右衛門は日常的に法令類を折本にしたためて教材としていた。のち嘉永元（一八四八）年十一月、折本目録を作った際、その序文で平右衛門は、法令類を教材に用いる意図を次のように述べている。⁽¹²⁾

幼童へ御高札面、五人組前書、慶安度御改革教諭書、御拳場御法度書類、川船御役所差上書類、寺社御掟、質地証文案詞向、御定法御触其外雑事御触書類、枅秤紺屋鍛冶剛屋議定雑事諸証文案詞等為読習、成人之期御大法をも相弁、身分を慎、毎事堅可為相守度ハ勿

論、持高丈ヶ候事之取扱之節、分別之端しにもと希ふ心計りに、老の拙筆を不顧紙上を汚し候

成人したのち、法令をわきまえ、身分を慎んで遵守するのは勿論のこと、持高に応じた振る舞いをする際の分別を

養つて欲しい、というのが狙いである（傍線部）。平右衛門にとって、法令類は、身の程をわきまえて、うまく世渡りしていくために必須の知識であつた。この折本目録には「文政度御改革御教諭書 壹冊」が含まれており、文政改革議定もまた、習得すべき知識の一つと考えていたことが分かる。このように平右衛門は、文政改革という新しい政策を、子供たちにも教授すべき規範として受容し、手習いという行為を通じて、実際に伝えていったのである。

以上の二例から、八条村寄場組合の惣代層が、文政改革教諭を肯定的に受け止め、あるいは従順な姿勢で受容していたことが読み取れる。実際、八条村寄場組合では、文政一三（一八三〇）年七月に「副議定一札之事」という内議定を独自に結び、地域の取締方針を具体化している。⁽¹³⁾その第一条で、関東取締出役の「厚御教諭」を「忘却不仕候やう」に「猶村々取締ニも相成候廉々」を定めたと謳われているように、八条村寄場組合の惣代層は、文政改革教諭を受容したうえで、地域の取締をさらに推進する姿勢を示している。

二 関東取締出役の教諭と惣代層

文政改革以後、関東取締出役は改革組合村を単位にさま

さまざまな政策を教諭していく。では、関東取締出役の教諭とは具体的にどのようなもので、八条村寄場組合の惣代層はそれをどのように受け止めていたのか。以下、教諭の具体相が判明する二つの事例から、検討していきたい。

(1) 天保八年の「困穀」政策と川崎村平次郎

まずは、川崎村平次郎の記録をもとに、天保八（一八三七）年の「困穀」政策の事例を取り上げる⁽¹⁵⁾。

この政策は、天保飢饉を教訓として、幕府が関東農村に対して、改革組合村を単位とする新たな備荒貯蓄制度を提示したものである。御料・私領の別なく組織された改革組合村が主体となれば、関東全域に満遍なく貯穀を実現できるという壮大な構想であった。ただし、同年一二月に勘定奉行が代官に宛てたと思われる通達では、今回の困穀は必ずしないといけない訳ではなく、備荒のために自発的にさせる趣意であるから、行き届かない者は今すぐしなくても構わないという心得でよくよく教諭せよ、とされている。すなわち、この困穀は強制ではなく、あくまで教諭によって村々に自主的におこなわせるのが基本方針であった。この通達は、個別領主支配の単位で既に貯穀をおこなっている上に、新たな貯穀が始まるのは難儀であるという村々の訴えが相次いだことから、対応を指示したものである。関

東取締出役による「困穀」政策は、確かに天保飢饉という社会的危機に対する幕府の対応の一つであったが、関東一円に対する幕府政策というよりは、個別領主支配の存在を前提として、補完できる部分を幕府が教諭によって促すというにとどまるものであった⁽¹⁶⁾。

関東取締出役は、各地を廻村して、請書の雛形に書かれている「困穀」政策の趣意を、惣代たちに口頭で教諭していった。八条村寄場組合は、天保八年九月上旬にこの政策を申し渡されたが、村々は難渋を示したようだ。約二ヶ月後の十一月八日、谷古田領（草加宿寄場組合か）の惣代とともに、関東取締出役堀江与四郎に呼び出された際、大惣代の平次郎らは、高持百姓の困窮を理由に、来る天保九年まで困穀の開始を年延べして欲しいと願い出た。これに対して堀江与四郎は、年延べを受け入れつつ、来年には必ず実行するという形式で書類を提出させようと、惣代たちに厳しい言葉を浴びせた。

一体九月中申論置候義を、是迄等閑可置筋無之、如何之心得方ニ候哉、八条・谷古田抔者、去年飢饉知らずニ米之飯を給て打過て居ル領中ダ、心得方ニ依而者米之飯を喰ふ事がならぬぞ、難儀と言のを此方デ申付と言筋デワナイ、其方共者全体心得方が違ワイ、万民助ヶ之ため、御上ニ而も教諭致ノダ、八州取調ニ依

而、来九月迄も可掛、年延之儀者分テ居ル、明年何程
 困穀二成と言所を帳面可差出、目当テ之なき年延と言
 ハ訳がわからん、大小惣代ニ而取調、凡ニも石数書出
 せよ、明年凶作ニ候ハ、其内を半石積と言物歟、書
 出しタケ積ねバならぬと言筋デモナイ、豊凶ニ依而
 ハ何れとも成

堀江は、これまで返答を等閑にしてきた惣代たちを責
 め、ここは他地域に比べれば飢饉の影響は小さかったとの
 認識を示しつつ、来年の困穀の見積りを明記した帳面を提
 出せよと強く迫っている。しかしその一方で、この困穀を
 御上からの「申付」と思うのは心得違いである、万民救済
 のために「教諭」しているのだ（傍線部）、と言っている
 点にも留意したい。

続いて、一緒に呼び出された谷古田領の惣代たちも年延
 べを願ひ出た。すると堀江は大いに立腹して、次のように
 言う。

是八州之事ニ候得者、少シ宛困候而も余程之事ニ成で
 あるふ、少も出来ぬと言事ハ有マイ、難儀ニ而出来ぬ
 と言村方者、石数取調帳江下ケ札を以可差出候、一組
 を帳面組訳者不宜、大小惣代之もの申論方不行届、八
 条・谷古田困窮村々と言でハナイ、此方今申付ルと言
 筋デワナイ、兼而申論通り、鎮守へ奉納心地を以と論

有ワイ、問屋旦右衛門忤、其方名主見習も勤居ナガラ
 行届ヌ出来ぬ事ナラ、是迄不等閑廻村先江可申出答、
 此節呼出し迄差置、近クイ来タ序と言心持ダナ、早々
 取調、石数帳面可書

再び惣代の等閑を責めながら、全く出来ないはずはな
 い、難渋を示す村方は「下ケ札」＝名指しにして提出せよ
 と脅しながら実行を迫る。ただしここでも、こちらから
 「申付」ているのではない、「申論」ているのだ、と付け加
 えている（傍線部）。

このように、関東取締出役堀江与四郎の教諭とは、決し
 て優しい口調で道理を諭すようにおこなわれたのではな
 い。叱りつけるような口調で、惣代や村役人の責務を問い
 詰め、あるいは脅し、政策の実行を厳しく迫るものであつ
 た。堀江自身は、幕府の方針を踏まえ、これは命令ではな
 く教諭なのだと強調しているが、その区別は実態として曖
 昧である。堀江にとつては、村々の自発性を喚起する効果
 があるならば、叱責も詰問も脅しも教諭のうちであつた。

教諭のもつこうした性格は、惣代層にとつて苦痛であつ
 たことだろう。八条村寄場組合では、なお年延べを望む声
 が多かったようで、この後も書類を提出せず、あくまで歎
 願を継続する方針であつた。一二月、再び堀江から書類提
 出の催促を受けた際、平次郎は次のように記している。

御触ニ齟齬いたし候願ニ候得ハ、由も御聞濟と申ニも至り申間敷、何与歟逃言葉、来春迄相延候様いたし度、大小惣代相揃、手強延願致候方ニ可有之哉、又者両三人ニ而、手強御教諭も候ハ、外惣代村々へ談候杯と相逃可申方ニ候哉、御相談次第、誰ニも人身御供ニ参り候ものも無覺束事ニ候

御触に齟齬する願いだからとても聞き届けられないだろうが、何とか逃げ口上をして来春まで引き延ばしたい。それには、大小惣代が全員で出頭して強硬に歎願するのがよいか、あるいはわざと少人数で出頭して、強硬な教諭を受けたら「他の惣代と相談してから」と逃げる方がよいか、作戦は惣代層の協議次第だが、いずれにしろ「人身御供」に行く者がいるかどうか覚束ない、と言う。

惣代層は、村々の声を代弁しなければならないが、強硬な教諭で迫る関東取締出役を相手に、願いを押し通したり、うまく逃げたりすることは容易でない。そのため、惣代層は関東取締出役の面前に出ていくことを「人身御供」すなわち生け贄に差し出されるに等しい、誰も引き受けない仕事と認識していたのである。

(2) 天保一五年、道案内の組合村移管と西袋村平右衛門

次に、西袋村平右衛門の記録をもとに、天保一五(一八

四四)年の道案内の組合村移管の事例を取り上げる。

道案内とは、関東取締出役の手先として捜査・捕縛に協力した在地の人間のことである¹⁷⁾。地域の事情通で、半分は堅気だが、半分は裏社会に通じた、二足の草鞋を履く者が多かったと言われている。なかには、関東取締出役の権威を笠に着て地域で横暴に振る舞う者もあり、たびたび問題となった。もとは関東取締出役が人物を選び、行く先々で必要に応じて日当を支払い雇用していたが、天保一五年、改革組合村ごとに人選して定員を置き、改革組合村の費用から年給を支払って雇う仕組みに変更された。建前としては村役人のなかから選ぶこととされたが、実際には村役人に務まる役ではないため、経験ある百姓に委任する場合が多かった。それでも、改革組合村にとっては、道案内の横暴に一定の歯止めが掛けられるようになる反面、これまで幕府が賄ってきた経費を新たに負担しなければならなくなる。官から民へ、権限と負担をセットで移管する政策であつたと言える。

この政策に対する八条村寄場組合の対応について、平右衛門は、事実経過に自らの所感を交えて記録を残している¹⁸⁾。それによれば、八条村寄場組合は、天保一五年正月二〇日、関東取締出役富田錠之助から道案内を人選して報告するよう口頭で申し渡され、二月二日、組合村々が集まっ

て対応を評議した。しかし村々は、組合村内部に信頼して道案内を任せられる人物が思い当たらなかった。また、「従古来例も無之」「新規」のことであるから、関東取締出役の「口達」だけではなく、あとで正式な「御触」が出るのではないか、との憶測もなされ、ひとまず該当者がいないと報告することに決定した。ちなみに、この政策は、関東取締出役の廻状と口頭の申し渡しによっておこなわれ、その後も「御触」Ⅱ老中や勘定奉行などの書付が村々に示されることはなかった。

その後、八条村寄場組合は、富田からたびたび廻状で催促を受けるも対応せず、五月二〇日、三度目の催促に応じようやく富田のもとに惣代たちが出向き、該当者がいない旨の書面を提出した。すると富田は、これまで「等閑」にしてきた惣代たちを叱責し、「下役之もの不差出心底ニ候ハ、自分ニ而相勤候心得ニも可有之、以来所々江召連候間、此段其方より申聞可被置」と言ったという。すなわち、道案内を選ぶ気がないのなら、惣代自ら勤めるつもりだな、今後は道案内としてあちこち連れ回すから、このことを他の惣代たちにも申し聞いておくように、と脅したのである。

これを受け、「此節ハ是悲決着を付不申候而ハ不相済」と悟った八条村寄場組合は、五月二八日、惣代層が寄合を

開いて再評議したが、ここでも対応を決めきれなかった。

其訳ハ①是迄申立候通りニ泥添人物無之と申立、且給料差出し候事も村々迷惑と申候ハ、御申掛之通、大小惣代江道案内被仰付、上州・秩父迄も御召連可被成等と先達而被仰聞候通、無途方も御申聞ニも可有之歟、上下之習ひ御答ニ当惑、且又②御改革御取極最初ニも道御案内村々懸りと申事ハ御座なく候処、今般新規御仕法ニ而、年々村々ニ而入用も相掛り候事ニ候へハ、小前末々迄如何可存哉、旁々以御村々江御熟談印書ニ而御取極メ無之候而ハ、大小惣代ニ而最易ニ否決定御答難成筋

決めきれなかった理由は、文政改革時にはなかった「新規」の負担増であるため、村々の同意を取り付ける必要があるとの判断であった（傍線部②）。二月二日の評議でも話題に上っていたように、八条村寄場組合では、一貫して道案内の組合村移管を前例のない「新規」の政策と認識しており、その正当性に疑念を抱いていたことが分かる。ちなみに同史料は、冒頭に『遺老物語二』なる書物や正徳・天保期の道案内・目明しに関する法令類を引用して記述を始めている。これは、平右衛門が諸記録を参照し、歴史を遡ってこの政策の「新規」性を確認したことを示している。すなわち、八条村寄場組合の疑念は、決して感覚的な

ものではなく、この地域に蓄積された「知」に裏付けられたものであった。関東取締出役の催促を「等閑」にし、適任者がいないという理由で負担増から逃れようとした背景には、こうした政策認識があったのである。

しかし、この日の寄合では、これ以上異議を申し立てることをあきらめ、道案内を選する方向で話が進められている。それは、これまでと同じように、適任者がいない、新たな出費は村々が迷惑すると申し立てても、惣代層を道案内に任命して上州や秩父までも連れ回すなどという関東取締出役の「無途方も御申聞」を前に「御答ニ当惑」、すなわち返す言葉を失ってしまったからであった（傍線部①）。関東取締出役の脅し文句が、惣代層を黙らせ、政策を受容させたのである。結局、八条村寄場組合は、翌二九日、三五カ村の惣寄合を開いて、大原村百姓升五郎に道案内を頼むことに決めた。

以上の経緯を記した後、平右衛門は次のような「愚案」を記し、総括している。

：（前略）：関東一手御取締御場広之事にて右御掛様方而已二而ハ御聴入も少く御道順逆も御座候事にて、自ら御締も寛宥二も至り可申哉との思召二も候而、村々役人共御案内之代り定出方道案内之もの取極可申段御談被仰聞候義、尤定式出之もの頼候二ハ、相当之

手当もいたし候儀ハ、先ハ新例ニ被存候得共、是以下々良民御救ひ行届候様二との御内慮と相心得：（後略）：

平右衛門は、「新例」の正当性になお疑念を抱きつつも、政策を受容した後はむしろ、これも「下々良民御救」の「御内慮」なのであると、その趣意を好意的に解釈した。まるで自らに言い聞かせるように疑念を飲み込み、現実に合わせて認識を修正したのである。こうした平右衛門の心の動きは、前述した「身分を慎」「分別」を養うために法令類を読み書きするのだという彼の処世観とも合致する。

（3）小括

ここまでの分析をいったんまとめておこう。

第一に、関東取締出役の教諭とは、決して優しい口調で道理を諭すようなものではなく、高圧的な口調で、叱責、詰問、脅しを織り交ぜながら、政策の実行を迫るものであった。もともと、各出役の個性も考慮する必要があるため、直ちに全ての出役がこうした調子で教諭していたとは言い切れない。ただし、文政改革教諭のなかにも脅しの要素は見出されるから、これらは関東取締出役の教諭がある程度共通して有した性格と見てよいと考える。

第二に、そうであるが故に、八条村寄場組合の惣代層

は、関東取締出役の前に出て行くことを「人身御供」に等しい苦痛と認識していた。また、魯し文句の前に言葉を失い、たとえ政策の正当性に疑念を抱いていたとしても、自らその認識を修正することで政策を受容していた。

教諭というやり方でおこなわれた関東取締出役の支配は、地域の自主性に依拠するものであったが、その自主性とは、ときに厳しい教諭によって引き出され、または批判を封じることで調達されたものでもあったのである。

三 関東取締出役の教諭と組合村運営

以上のような教諭の性格は、惣代層による組合村の運営にどのような影響をもたらしただろうか。八条村寄場組合では、嘉永三（一八五〇）年に大惣代の大幅な再編がおこなわれている。この経緯を中心に、右の問題を検討していきたい。

（一）非協力的な村々・リーダー不在の組合村

先に述べたように、八条村寄場組合では文政改革直後に内議定を結び、地域の取締を推進する姿勢を見せている。しかし、その後の組合村関係の史料を読むと、村々は改革組合村の運営に熱心ではなく、むしろ非協力的であっ

た様子が散見される。例えば、前章で取り上げた天保八年の「困穀」延期の歎願中、出張先で臨機応変な対応が必要となった際、大惣代の川崎村平次郎は「代之もの多分二而相談合忝人も無之、忝人かつぎ二而当惑」、すなわち代理の者ばかりで相談相手がおらず、平次郎一人に責任がのしかかり困惑する状況に陥っている。その後の歎願活動においても、寄合の出席者が少なく願書の文面変更が議決できない、あるいは歎願から外れて独自の動きを示す村（瓦曾根村・伊勢野村）、寄合に出てこず意思確認ができない村（大瀬村）⁽²¹⁾があるなど、足並みの揃っていない様子が見て取れる。

弘化二（一八四五）年六月には、こうした村々の非協力的な態度が運営上の問題をきたし、関東取締出役に詫書を提出する事態となった。⁽²²⁾

前書之通御改革筋二拘り候事出来之節ハ、何れ之村方二而も、其小組惣代者勿論、寄場江通達いたし、相互二御取締筋行届候様可申合ため之組合定二候処、当組之儀者は迄仕癖不宜、地元村混雑ニ取紛不沙汰二候与而、其小組合二而も遠慮いたし居候故、既二大小惣代共手違出来、恐入候次第二付、向後取締向精々可仕旨を以、御取締御出役様江御忝書差上、御勘弁二相成候段、右写村々江御達之趣承知致候：（後略）：

詳しい事情は不明だが、村々が互いに「不沙汰」であったり、互いに「遠慮」したりする態度が原因で、何らかの手違いが生じたのだと言う。そして、「当組之儀者は迄仕癖不宜」とあるように、八条村寄場組合にはこうした雰囲気恒常的に存在していたのである。

互いに「遠慮」するような雰囲気とは、組合内部でリーダーシップを取る人間が存在しなかったことを示唆する。このことは、西袋村平右衛門の次のような事例からも看取される。⁽²³⁾

天保一四（一八四三）年、天保改革の質素儉約策の一環として、関東取締出役は在方の農間余業調査を実施し、華美な商売六業種（湯屋・髪結・酒食・小間物・刀研・拵屋）の営業を六〇日以内に停止するよう命じた。八条村寄場組合は、七月二三日に関東取締出役の調査を受け、その後、農間余業のあり方について村々が評議した。その結果、関東取締出役から命じられた六業種の営業停止を遵守するほかに、①寛政六（一七九四）年の鳥見による余業調査以後に開業した商売家は営業を停止させる、②食物を扱う商売家は、若者がたむろする場所となり、悪事を仕出かす原因になるので、「実用之品」「農家使用之品」のみを商い、塩煎餅、果物などの販売は止めさせる、という組合独自の方針が決定された。さらにその内容を「村々為申合議

定之事」という内議定に明文化した。しかし平右衛門は、内心では村々の決定に対して違和感を抱いていた。自身の記録に、次のような感想を記している。

：（前略）：村々評義之趣尤ニハ候得共、縦在郷たり共塩煎^餅前栽之瓜果物等迄も道中筋之外相絶し候ハ如何之事ニ而、在中ニハ腰掛ケ湯茶も無之様ニ而ハ往来之もの共難儀相成、病人子供江手宮寄之品も差支、道中筋迄買調ニ罷越候様ニ而ハ農業隙闕且又困窮民手製之利潤を失ひ渡世ニ送り方ニも差支可申歟、組合村々為申合方余り厳格過却而不仁ニも当り、農事妨御趣意ニも相叶申間敷哉と自己存候事ニ候得共、不取締之基との事、是以実事孰ニも程よき取計ひ方分別当惑異見書留

決定の内容はもつともだが、塩煎餅、前栽の瓜、果物までも在郷から無くしてしまうのはどうか。在中に腰掛・湯茶もないようでは往来の者が難儀する。この辺の者も、道中筋まで行かなければ病人や子供への手土産も買えないようでは農事の時間が取られてしまう。また、困窮した者が生活の手段を失い渡世でなくなってしまう。組合村の方針は厳格すぎて、却って「不仁」「農事妨」になるのではないかと自分は思うが、農間余業が「不取締之基」というのは尤もなことだから、「程よき」対応がどのあたりか、

判断に迷っているのです、ここに意見を書き留めておく、と言う。組合村の方針は、平右衛門の生活感覚からすれば厳しすぎるもので、かえって弊害が生じないかと心配していたのである。ただし、平右衛門は自身の意見を評議の場で強く主張しなかったと思われる。川崎村平次郎の記録によれば、「内議定致候而可然哉」と提案したのは、「西袋小沢氏」すなわち平右衛門であった。⁽²⁴⁾ 評議の場においてはむしろ、村々の意見を尊重して、それを後押しするような提案をしていたことが分かる。

その後の八条村寄場組合の動きも、平右衛門の心配とは裏腹に展開している。⁽²⁵⁾ 九月、関東取締出役は、組合ごとの対応の統一を図り、武州のうち中山道周辺の一〇組合に共通の内議定（以下、一〇組合議定）を作らせた。一〇月二十九日には、さらに範囲を広げようと、八条村寄場組合を含む四組合にも、一〇組合議定に連印するよう廻状で呼びかけた。これを受けて八条村寄場組合は、十一月一日に評議をおこなったが、「飴・菓子・果もの等商ひ向」についての規定が従来の自分たちの方針に「齟齬」するとして、一〇組合議定への連印を断り、一部の条文に手を加えた、ほぼ同様の議定を単独で結ぶことを選択した。一〇組合議定には、食物商いについて「貧窮又ハ老人身弱等ニ而農業も不相成、暮方ニも差支候者」が生活のためにおこなう場

合は、村役人を通じて組合村の承認を得れば可、という例外規定がある。⁽²⁶⁾ この点が、若者への悪影響を重視して例外を認めない八条村寄場組合の方針と異なっていた。まさに平右衛門が厳しすぎると心配した点の一つであったが、八条村寄場組合はその規定を堅持したのである。⁽²⁷⁾ この評議の際の平右衛門の動きは不明だが、評議結果を越谷宿の寄場役人・大小惣代に報告した一札に連印していることから、その場に居合わせていた可能性が高い。したがって、ここでも自身の意見は強く主張しなかったものと思われる。

このように平右衛門は、組合の方針に対して違和感を抱いた場合でも、それを強く主張した形跡が見られない。むしろ大勢の意見を尊重して、内心とは相反する行動を取っている。改革組合村の成立時から勤続する古株の大惣代であっても、他村に「遠慮」しながら、バランスを取って組合村運営に参画していたのである。

（2）嘉永三年の大惣代再編

リーダーが不在で、かつ構成員が非協力的な八条村寄場組合は、徐々に担い手不足に陥ったようだ。嘉永三年、八条村寄場組合は新たな大惣代七名を選出して関東取締出役に任命を願っている。その願書によれば、ことの経緯は次のようであった。⁽²⁸⁾

：（前略）：当組大惣代之儀、文政度御取極之七人
被仰付、御取締向相勤来り候処、式拾餘々年来相立、
追々死失・隠居等致し、当時關役二相成、御取締筋難
行届、御用御差支ニ可相成哉二付、今般組合村々一統
相談之上見立可奉願旨、再々応及熟談候所、何様ニも
辞譲いたし合一知不仕、必至与差支、無挽小組合限壹
人宛其組内ニ而人撰いたし候処、名前之もの七人ニ而
向後御取締御用番相勤度：（後略）：

当初七名いた大惣代が死亡・隠居などで徐々に減つてい
き、地域の取締が行き届かず、御用にも支障をきたす恐れ
があるので、組合村で評議した。しかしみな互いに「辞
譲」して決まらなかったため、仕方なく小組合ごとに一人
ずつ出して、七名を選出したという。史料の制約から、こ
の直前の大惣代の人数や顔ぶれが不明だが、西袋村平右衛
門も当時六五歳であり、もはや大惣代の世代交代は喫緊の
課題であつたと思われる（もともと、平右衛門はここでも
再任され、七〇歳まで勤め続ける）。しかし、村々は大惣
代就任に消極的で、選出が難航したのである。前節で明ら
かにした八条村寄場組合の雰囲気、ここにも如実に表れ
ていると言えよう。

これに関連して平右衛門が作成したと思われる記録が、
冒頭に「大小惣代役給・賄料・寄場江筆墨紙代等之儀ニ

付、組合村々風聞之趣」と題された史料である。年次記載
を欠くが、内容から、嘉永三年の大惣代選出の過程でおこ
なわれた議論の記録と考えられる。記述が散漫で解釈の難
しい史料だが、全文引用する紙幅はない。以下、筆者が施
した解釈にしたがつて、大惣代選出に関する議論と、それ
に対する平右衛門の意見を再現してみたい。

史料の概要は、大小惣代・寄場役人に給金を支払うとし
たらいくらが適当かという議論についてのメモと言える。
表題の下端に「正福寺寄合之節、趣意付、村々江相談之題
也」とあるから、恐らく大惣代がなかなか選出できないた
め、就任者に「趣意付」＝見返りを付与する目的で、給金
の議論が始まったと考えられる。議論されている給金の内
訳は、①筆墨紙代（年給）、②寄合の役給（日当）、③他所
出張（史料文言では「他所出」）の役給（日当）、④賄料
（寄合・出張時の宿泊費・食事代など、日当）である。各
費目は、大惣代四人、小惣代七人、寄場役人一人の人数を
乗じて総額が算出されている。したがって、八条村寄場組
合では当初、新たに選出する大惣代的人数を四人と見込ん
でいたと思われる。このうち、とくに③他所出張の役給の
金額が問題となった。はじめは大惣代・小惣代とも一人あ
たり銀一五匁という話であつたところ、「大小惣代役給一
日銀拾五匁ニ而ハ過当ニ付減少いたし、其代り他所出テ之

節ハ大小惣代惣出勤ニ可致哉」との意見があつた。すなわち、日当を減らす代わりに、他所出張は大小惣代全員で勤めたいとの希望が出されたのである。そこで、次の「小作田寄合」では、大惣代が銀一五匁、小惣代は銀一〇匁という減額案が話し合われた。

平右衛門は、こうした議論の流れに不満を抱いていたようで、「小作田寄合」前後の様子を、次のように記している。

世間風評之趣ニ而ハ他所出役給餘り過当之よし、書面頼ニ而ハ至極尤之筋ニ有之、我等拵縦再勤候迎も今少しのうち、是迄廿ヶ年来さへ無給阿房役勤居候得者、多少決而頓着者無之候得共、今般大惣代新規見立頼候儀、分限高厚薄ニ不拘、兎角村々之事穩ニ取扱可相成器量を見立頼候事ニ而、他所出用向者三ヶ年二一度位之事ニ可有之筈ニ候所、^(此カ)節ハ大小惣代惣出勤ニ可致間、役給減少いたし候様談事度趣ニ外々之風聞ニ候^(此カ)段小作田江寄合、内評議いたし候趣者、他^(所カ)□□出勤候而も引ケヲ不取様速ニ御用并可相成仁を撰、両三人ニ而成丈ヶ人少キニいたし、八条領之棕鳥連と他領の笑草ニ不成様いたし度、手当テを少くいたし候而者惣出棕鳥連ニ成、却而掛り高相嵩可申、手当薄クいたし大勢之代ヲ兼、人身御供ニ成り可骨折と申ものハ無覚

東、誰彼も迷惑可申事ニ候、両三人ニ而御用弁いたし候様、其もの共骨折候ハ、役給手当者厚クいたし可然…(後略)：

やや文意が取りにくい、意識すれば以下のようになる。現在村々で話し合われているところでは、他所出張の日当があまりに高いとのことだが、大惣代は証文を差し入れて頼むほどの者だから、至極妥当な金額である。自分などはもし今回再選されても先は長くないし、これまで二〇年もの間、無給で「阿房役」⁽³⁰⁾を勤めてきたのだから、今さら金額の多少には頓着しないが、今回新たに大惣代を選んで頼むとなれば、分限や持高の多少にかかわらず、村々のことを穩やかに取り扱えるような器量を見立てて頼むべきである。それなのに、三年に一度くらいいしかない他所出張について、大小惣代全員で行きたいから日当を減らそうなどという話になっている。このことについて「小作田寄合」の評議で私が述べたのは、以下のことである。他所出張をしても引けを取らず、速やかに御用を勤められる二、三人程度の少数精鋭を選んて、八条領の「棕鳥連」⁽³²⁾と他領の笑い種にならないようにしたいものだ。日当を少なくして大小惣代全員で他所出張をすれば、「惣出棕鳥連」になるだけで、却って費用は高む。日当を薄くすれば、大勢の代わりに「人身御供」になって骨折ろうという者がいるだ

ろうか。誰もが迷惑するはずだ。だから二、三人で御用を勤め、その代わりに骨折ったその者たちの役給・手当を厚くしてやるべきだ、と言う。

天保八年に川崎村平次郎が使っていた「人身御供」という表現がここにも登場し、他所出張の代名詞になっている。すなわち、ここで問題となっている他所出張とは、直接的には関東取締出役の廻村先に罷り出ることを意味するが、それは前章で見たような、厳しい教諭にさらされながら、村々のために「人身御供」になる覚悟を要する、苦痛な仕事なのであった。したがって、村々からは、少人数で苦痛を背負うより、日当は少なくても大人数で勤めて気楽になる方がよいという希望が出されていたのである。そうした状況は、徐々に人数が減っていくなか、二〇年間も無給で「阿房役」を勤めてきたと自負する平右衛門にとって、苦々しく思われたに違いない。そこで、毅然とした態度で御用を勤められる少数の者が大惣代を勤めるべきで、組合村全体のために骨折ってくれる彼らには高い役給で報いるべきだと主張したのである。史料の後略部分では、薄給だが大人数で他所出張を勤めた場合と、高給だが少人数で勤めた場合の金額を計算して比較し、後者のほうが出費も抑えられることを確認して、自説を補強している。ただし、史料の末尾では「三十五ヶ村二而存意望次第二て然る

へく」、すなわち最終的には村々の判断を尊重するとしている。異なる意見ともバランスを取る平右衛門の姿勢が、ここにも表れている。

この給金の問題については、残念ながらその後の議論が不明である。しかし、少なくとも大惣代の人選に関しては、平右衛門の意見は考慮されなかったと見てよいだろう。先に述べたように、八条村寄場組合は結局、小組合から一人ずつ、合計七人という大人数の大惣代を選出した。他所出張だけでなく、大惣代そのものの人数を多くした村々の最終判断は、少数精鋭に頼みたいという平右衛門の構想とはかけ離れている。八条村寄場組合の惣代層は、この選出によって何とか世代交代を果たしたが、組合村運営に消極的なこの地域の特質は、その後に引き継がれていったと考えられる。

以上の経緯から分かるように、村々が大惣代の就任に消極的になる理由の一つは、他所出張＝関東取締出役の面前に罷り出ることであった。その背景には、「人身御供」という比喩で表されているように、関東取締出役の厳しい教諭にさらされることへの畏怖があったと考えられる。すなわち、前章で明らかにしたような関東取締出役の教諭のあり方は、組合村運営に対する村々の主体性を減退させる一因になっていたのである。

おわりに

最後に、繰り返しを恐れず、本稿で述べたことを再度まとめておきたい。

関東取締出役の教諭とは、決して優しい口調で道理を論すようなものではなく、高圧的な口調で、叱責、詰問、脅しを織り交ぜながら、政策の実行を迫るものであった。

そのため、八条村寄場組合の惣代層は、関東取締出役の前に出て行くことを「人身御供」に等しい苦痛と認識していた。また、脅し文句の前に言葉を失い、たとえ政策の正当性に疑念を抱いていたとしても、自らその認識を修正することで政策を受容していた。さらに、関東取締出役の厳しい教諭は、村々が主体的に組合村運営に参画することを忌避する一因となっていた。

これほどまで関東取締出役に対して畏怖の念を抱き、また改革組合村の運営に一貫して消極的な八条村寄場組合のあり方は、やや極端な事例であるかも知れない。しかしそうであるが故に、関東取締出役の教諭が地域社会にもたらしたものの一端を、象徴的なたちで示しているように思われる。すなわち、地域の自主性に働きかける教諭は、ときに叱責・詰問・脅しを織り交ぜながら高圧的ななされる

ことよってこれを引き出し、また批判を封じ込めた。こうした教諭を受けた惣代層は、苦痛と村々への責任との間で葛藤を抱え込み、組合村運営への主体性を減退させていった。教諭がもたらすこうした作用は、多かれ少なかれ、どの改革組合村の惣代層にもはたらいていたはずであり、本事例を通じて、地域社会の主体性を解釈するにあたって留意すべき点の一つを示し得たのではないかと考える。

もともと、組合村運営の主体性は、地域構造や政策内容など、他にも考慮すべき分析軸があることは言うまでもない。そうしたさまざまな要素を考慮して事例を積み重ねていくことを今後の課題として、ひとまず筆を擱きたい。

註

(1) 拙稿「近世後期における関東取締行政の展開」(『関東近世史研究』八〇、二〇一七年)。

(2) 筆者は既に、こうした研究史整理に基づき、文政改革時の上武両国の反応を検討したことがある(拙稿「文政改革教諭の展開と地域社会の動向——上武両国を事例に——」『日本史攷究』三八、二〇一四年)。

(3) 八条領におけるさまざまな地域結合については、八潮市史編さん委員会編『八潮市史 通史編Ⅰ』(八潮市役所、一九八九年)、工藤航平「近世後期の葛西用水八条領組合の

組織的変遷と地域意識」(埼玉県立文書館『文書館紀要』一九、二〇〇六年)などを参照。

(4) 本間清利「文政改革組合村―武州越谷地域を中心として―」(『埼玉研究』二五、一九七四年)。

(5) 文政一二年は、小澤家文書一一五(八潮市立資料館蔵写真帳)、天保一五年は、『越谷市史三 史料一』(越谷市役所、一九七三年)三八九―三九〇頁。

(6) 埼玉県立文書館蔵県史編さん資料CH二七六。なお、原本は東北大学付属図書館蔵。平井誠二「川崎村『御改革諸記録』」(『八潮市史研究』六、一九八七年)の史料紹介があり、また服藤弘司『地方支配機構と法 幕藩体制国家の法と権力Ⅳ』(創文社、一九八七年)が翻刻を掲載している。

(7) このテキストの性格については、拙稿「上武両国における文政改革の展開と『教諭書』」(『民衆史研究』八六、二〇一三年)を参照のこと。

(8) この書き込みに関して、前掲註(6)「[平井一九八七]は、幕府政策に対する平次郎の「強い不満」「批判的考え」を示していると解釈する。しかし氏は、文政改革が「教諭」によっておこなわれた政策だったことを見逃している。

(9) 以下の記述は、小沢正弘「寺子屋尚古堂について」(『八潮市史研究』一、一九七八年)、同「解説」(『八潮市史料編近世Ⅱ』八潮市役所、一九八七年)、同「八潮のふる

関東取締出役の教諭と組合村運営

さと新書一 小沢豊功」(八潮市、二〇〇一年)を参照している。

(10) 前掲註(9)「小沢一九八七」、七六五―七六九頁の表五および本文。

(11) 小早川家文書二五〇(八潮市立資料館蔵写真帳)。

(12) 前掲註(9)「小沢一九八七」、七六七頁。

(13) 前掲註(9)「八潮市史 史料編近世Ⅱ」七八・七九頁。

(14) 前掲註(6)「御改革諸記録」二。内議定には、他地域で結ばれたものを範型として転用している事例も多く、一概に地域の主体性を読み取ることはできない(前掲註(2)「拙稿二〇一四」)。ただし八条村寄場組合の場合、端々の文言、値段規定の数値などに、上武両国に流布していた範型を参照している形跡が無いではないが、全体としてはオリジナリティが高く、当該地域の村役人層が自分たちで考案したものと思われる。

(15) 以下、本節の記述および史料引用は、とくに注記のない限り、前掲註(6)「御改革諸記録」三に拠る。

(16) この政策をめぐる事実関係や位置づけについては、前掲註(1)「拙稿二〇一七」を参照のこと。

(17) 道案内を論じた先行研究には、川田純之「関東取締出役の道案内について」(『栃木県立文書館研究紀要』三、一九九九年)、安斎信人「近世後期における『改革組合村』制

について―『組合村』の設置と警吏『道案内』の社会的役割―(『関東近世史研究』四八、二〇〇〇年) などがある。

- (18) 以下、本節の記述および史料引用は、『八潮市史 史料編近世Ⅰ』(八潮市、一九八四年) 二九一―三〇三頁に拠る。同史料は、大曾根村豊田家に残る文書だが、もともと西袋村平右衛門が編纂した記録を、豊田家が書写したものである(工藤航平「農村における編纂物とその社会的機能」『二橋論叢』一三四(四)、二〇〇五年)。

- (19) 前掲註(18)『工藤二〇〇五』を収録した工藤航平『近世蔵書文化論 地域〈知〉の形成と社会』(勉誠出版、二〇一七年) は、同史料のような、あるテーマに沿って情報を取捨選択し、論理化した「村の編纂物」・「村の地方書」を、「地域〈知〉の集約版」と評している。

- (20) 前掲註(7)『拙稿二〇一三』。

- (21) 前掲註(15)に同じ。

- (22) 前掲註(6)「御改革諸記録」四。

- (23) 以下の記述および史料引用は、特に注記のない場合、すべて前掲註(18)『八潮市史 史料編近世Ⅰ』四七六―四九六頁に拠る。

- (24) 前掲註(6)「御改革諸記録」四。

- (25) 以下の記述および史料引用は、特に注記のない場合、すべて前掲註(6)「御改革諸記録」二に拠る。

- (26) 久喜市史編さん室編『久喜市史 資料編Ⅱ近世Ⅰ』(久喜市、一九八六年) 三二―四〇頁。

- (27) その一方、酒屋については、天保一四―一五年にかけて、居酒を止めて升酒売のみおこなうので商売を存続させてほしいと、組合村ぐるみで歎願活動を展開している(前掲註(24)に同じ)。したがって、八条村寄場組合は質素儉約策をそのまま受容したのではなく、余業が展開しつつある農村の実情に合わせて取捨選択していったと言える。その際、なぜ飴・菓子・果物類商売に対してのみ厳しい態度を取った(または取りえた)のかについては、地域構造の詳細な分析を含めて、今後の課題としたい。

- (28) 大曾根村文書二二七(八潮市立資料館蔵)。この史料自体は年欠だが、嘉永三年七月付、大曾根村佐五右衛門宛ての大惣代頼み証文(大曾根村文書二二九)等と一括されているから、同年同月のものと見てよい。

- (29) 小澤家文書一一一(八潮市立資料館蔵写真帳)。以下、本節の記述および引用は、すべてこの史料に拠る。

- (30) ここでは「無給」とあるが、文政一三年の内議定(前掲註(14))には、先の②④の費目に該当する規定があるから、正確には日当の支給があったはずである。ただし、年給である①筆墨紙代がなく、②④の日当もこの時の試算に比べると金額が低いため、実費支給であって報酬では

ないという感覚であったか。

(31) 「阿房」は「阿呆」と同義。大惣代のことを、あはらしい役目だと自虐的に述べているのである。

(32) 「棕鳥」とは都会に出てきた田舎者を馬鹿にして言った表現。ここでは、関東取締出役の前に出た時、都会に出た田舎者のように右往左往してしまう状態のことを指していると思われる。

【付記】

本稿は、第八二回民衆思想研究会での口頭報告「関東取締出役の教諭と組合村惣代層」（於早稲田大学早稲田キャンパス二二号館二〇一教室、二〇一五年二月二日）、および二〇一六年度早稲田大学史学会大会での口頭報告「関東取締出役の「教諭」と組合村惣代の政策認識」（於早稲田大学戸山キャンパス三三三号館第一会議室、二〇一六年一〇月一五日）をもとに作成したものである。口頭報告の場でご意見をくださった全ての方に、この場を借りて感謝申し上げます。